

IV-2. 電磁波過敏症からの回復の語り

早稲田大学人間科学研究科¹ ポレポレクリニック² 早稲田大学人間科学学術院³

○伊藤 康文¹ 前田未加子¹ 中上 綾子¹
石川 舞¹ 伊藤 由里¹ 鈴木 勝己³
辻内 優子² 辻内 琢也³

目的：電磁波過敏症は、1980年代に William J Rea によって Electrical Hypersensitivity と命名された疾病がもとになり、電磁波に対して異常に強い反応を起こす状態だとされている。頭痛・疲労・睡眠障害・皮膚の異常感など症状は様々で、化学物質過敏症と併発するケースも多いが、現在においても明確な診断基準はない。本研究では、電磁波過敏症の病者の語りから、彼らの病苦を明らかにし回復過程を記述することを目的とする。**対象と方法：**電磁波過敏症と診断された病者を対象に、非構造化面接によるインタビュー調査を行った。面接時間は160分であった。**結果：**<事例>30代・男性・イラストレーター。2005年に化学物質過敏症、2006年には電磁波過敏症と診断され、自宅のブレーカーを切る、テレビ・パソコンなどの電化製品を全て使わない生活を強いられていた。その後診断医師に紹介され、寝室の床をアースしたことをきっかけに、回復に向けた自己治療が開始された。自分の中で治療指針を持ちながら1年間の闘病生活を続ける中で、症状の緩和が感じられた。「ひよつとすると敏感さはだいぶ治まっているから、慣れさせれば恐怖感に打ち勝てるのでは」と生活の制限を解いていった。**考察：**病いを人生の流れの中の一つの壁と捉え、闘病生活の中での自分を支えてくれた人々との出会いによって、絶望を希望に変えていき回復に至れた、と病者自身は考察している。ここに自らの力によって健康を生成してゆく salutogenesis のプロセスが確認された。

IV-3. 中高年配偶者死別体験者の語りから見る現代の死をめぐる経験—告知の場面を通して—

早稲田大学人間科学研究科¹ 早稲田大学人間科学学術院²

○伊藤 由里¹ 中上 綾子² 前田未加子¹
古関 光浩¹ 鈴木 勝己² 辻内 琢也²

はじめに：死についての受け止め方は人により、時代により、文化により大きな違いが存在している。現代においては、非人間的な医療的言説への抵抗という意味も含め、個人的で特殊な病いの体験を重視しようという流れが徐々に現れ始めている。本研究は告知の

場面を通して、現代において人々が身近な人の死および自分の死の問題についてどのように関わっているのかを探る。**対象と方法：**50代前後という比較的若い時期に配偶者と死別した3名を対象に、半構造化面接によるインタビューをおこなった。面接時間は60分～90分であった。本発表は1例について報告する。**結果：**<事例>Fさんは現在60歳の女性、13年前、夫を肝臓がんで亡くした。Fさんは、医師からの検査の結果を本人には伏せ、自分ひとりで告知を受け止めた。手術後もがんであることを1年あまり本人には伏せたまま経過したが、死の数カ月前に、最初の検査で余命1年と告げられていたこと、そしてその時期がまわっていることを自ら夫に告げた。告知をせず過ごした1年の心の動きの変化を語った。**考察：**死に行く配偶者とのそれまでの関係の在り方は、告知をする・しないという選択に大きく関わってくる。隠し通して過ごした約1年間の心の葛藤、そして自分自身で告知した後のふたりの関係性の変化などが語られた。死に直面した時に過去の価値観を打ち破り、大幅な修正が行われていく姿が確認できた。

IV-4. 病者の「人生の物語」にせまる意義—線維筋痛症の事例を通して—

早稲田大学人間科学研究科¹ 早稲田大学人間科学学術院² ポレポレクリニック³ 日本大学附属板橋病院心療内科⁴

○中上 綾子¹³ 辻内 琢也² 前田未加子¹
伊藤 康文¹ 石川 舞¹ 伊藤 由里¹
鈴木 勝己² 辻内 優子³ 村上 正人⁴

はじめに：線維筋痛症のような慢性疼痛においては、病者の生活世界に接近したケアが重視される。本研究では医療人類学的手法によって病者のライフストーリーを描き出し、彼女らの生活世界に根差したケアの可能性を提示したい。**対象と方法：**線維筋痛症治療中の30～60代女性26名を対象に、半構造化面接による聞き取り調査を行った。面接時間は30分～90分である。面接内容はメモをとり、そのデータに基づいて分析した。**結果：**<事例>40代・女性。幼いころから度々、身体の痛みを訴えていた。19歳の時に家族が経営する食品関連の会社に就職し、一日中冷蔵庫の中で重い荷物を運搬する作業を一人で行っていた。その頃、外出先で腰を痛めて近くの病院にかかる。帰宅後も数日間、痛みのため家の中を這うように動いていた。家族関係および会社従業員との関係は良好である。42歳の時、踵と足首の痛みのため地元の大学病

院で精密検査を受けた。医師らに線維筋痛症であることが知れると、敬遠されたり心ない言葉をかけられたことがあった。その時に受けた屈辱は、病气そのものの痛みに加え、とても苦痛であったと振り返る。考察：病者のライフストーリーに耳を傾けると、そこには家庭・職場での人間関係、出産・育児や死別体験など、多彩な「物語り (Narrative)」がみとれた。こうした物語りを傾聴し、構成されてゆく瞬間に立ち会うことで、病者の「人生の物語」を共同で創り上げてゆくことが可能となる。

Ⅳ-5. PTSD をめぐる言説と、その苦しみと共に生きる人々—インターネット上に綴られる苦悩の物語—

早稲田大学人間科学研究科¹ 早稲田大学人間科学学術院²

○石川 舞¹ 前田未加子¹ 谷口 礼¹
中上 綾子¹ 古関 光浩¹ 伊藤 由里¹
鈴木 勝己² 辻内 琢也²

目的：本研究は文献研究により、DSM に PTSD が定義された社会的背景などを明らかにしつつ、臨床現場やメディアで使われている「PTSD」を学問的立場か

ら概観した。その上で、実際に PTSD で苦しむ人々のインターネット上の語り注目することで、PTSD を個人の視点から捉え、広く PTSD の全体像を捉えることを目的とした。対象と方法：PTSD 病者 2 名によるネット上の病いの語りを、フランク (A, Frank, 1995) が提示する「病いの類型」を枠組みとして分析、解釈を行った。結果：混沌の語りは、物語としての一貫性や統一性を欠くため、対人場面では語られにくいことが予想される一方で、ネット上の語りでは以下の点が顕著に表れた。つまり、混沌の語りや、医療者に対する率直な思いが堂々と語られる。言葉の概念を超えて存在する混沌とした世界でも、抽象的、比喩的な表現により伝達可能な語りに構成され得る。どのような物語であっても、それを受容してくれる聴き手が常に想定され、混沌の語りでさえも自由に吐き出せる場が確保される。さらに PTSD 病者は苦悩を語ると同時に、自らが自身の変化における証人となることが示唆された。考察：PTSD 病者の語りは、それ自体が探求の物語となり、彼らは人生の中にその苦悩を含ませることにより、自分なりの PTSD を構築し、その個人特有の PTSD の物語を生きようとしていることが明らかにされた。

●お知らせ

「編集委員会への手紙」原稿募集

本誌では「編集委員会への手紙」欄を設けています。本誌の編集に関する読者のご意見の交流の場としてご利用していただきたく、以下の要領で編集室宛に奮ってご意見をお寄せ下さることを期待しています。

- ①編集の方針や掲載された論文などに対する質問その他、幅広いご意見を歓迎します。
- ②原稿用紙 3 枚以内で簡潔におまとめ下さい。
- ③筆署名と所属を必ず明記して下さい。
- ④掲載については編集委員会に一任させていただきます (原稿の返却はいたしません)。
原稿は多少の字句の変更をさせていただくことがありますのでご了承下さい。

「心身医学」編集委員会